

掛唄で歌われることはなにか（2） —計量テキスト分析による掛唄の話題分析の試み—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 公開日: 2017-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梶丸, 岳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000195

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



掛唄で歌われることはなにか (2)

——計量テキスト分析による掛唄の話題分析の試み——

梶丸 岳

掛唄は今でも行われている掛け合い歌であり、その即興性の高さに特徴がある。本研究は計量テキスト分析によって掛唄で歌われる歌詞を分析し、話題の通時的変遷と話題間の関連性について検証することを目的とする。

まず Correlational アプローチによる分析について方法と結果の概略を示し、掛唄の話題がどのように抽出できるかを示した。そこで得られた知見を生かしてコーディングルールを作成し、掛唄の歌詞を Dictionary-based アプローチによって分析した。話題と年度のクロス集計結果から一部の例外を除き掛唄の話題には大きな変遷が見られないことを指摘した。また共起ネットワークと類似度行列に基づいて掛唄の話題それぞれの関連性の強弱を明らかにし、さらに用例からその要因について考察した。

最後に個々の語や首ではなく掛け合い全体を量的・質的両方の手法を組み合わせる分析することを今後の課題として挙げた。

キーワード：掛唄、話題、計量テキスト分析

1 掛唄の話題抽出の試み

はじめに

掛け合い歌は一定の旋律にある程度即興で歌詞をつけて掛け合う芸能であり、一般に音楽的表現よりも歌詞の言語表現のほう重視される〔梶丸 2013〕。このスタイルの歌は世界各地に見られ、とりわけ奄美や中国西南部の事例についてはある程度研究蓄積がある〔中原 1997; 梶丸 2014a〕。掛唄はそうした掛け合い歌の一種であり、現在は秋田県の横手市にある金澤八幡宮と美郷町にある熊野神社でそれぞれ年一回開かれる大会でおもに歌われている（図1、図2）。

掛け合い歌にはそれぞれ決まった歌い方があるが、なかでも掛唄は即興性の高さに際だった特徴がある。多くの掛け合い歌は大量の定型表現を歌い手がその場に合わせて歌うスタイルを取るのに対し、掛唄では「仙北荷方節」という民謡から流用・改変したフシを用い、基本的にその場でほぼ完全に即興で考えついた歌詞が歌われる。掛唄の歌詞は7・7・7・7・5のいわゆる近世調歌謡形式〔梅澤 1999:186〕を規範としているが、フシが歌詞に対してかなり長いので、多少字余りが起きても問題なくフシのなかに収めることが可能であり、実際ほとんどの歌で字余りが起きる。こうした韻律のルーズさもあるが、歌詞の多くは日常会話にかなり近い表現が使われる。よって、掛唄で歌われた歌詞は発話と、掛唄の掛け合いはフシのつけられた会話と見なすことができる⁽¹⁾。

掛唄で交わされる歌詞が言及する話題（トピック）も身近な農業から国政まで多岐にわたっている⁽²⁾。掛唄についてはそれぞれの大会を主催している保存会の記念誌などにおいてどのような歌が歌われてきたか分類されているが〔宮崎 1990; 安倍ほか編 2003; 加藤編 2007〕、いずれもその年度限りのアドホックな話題分類に留まっており、掛唄で歌われた話題の通時的・全体的な分析は行なわれてこなかった。

本稿の目的は、こうした掛唄の「話題（トピック）」を計量テキスト分析の手法を用いて分析し、どのような話



〔図 1〕 秋田県地図



〔図 2〕 金澤八幡宮における掛唄大会の様子

題が掛唄で歌われてきたのか、それぞれの話題がどのような関連性を持っているのかを明らかにすることである。これにより、掛唄でなにが歌われるのかの全体像を描き出すことを目指す。

なお本稿は前稿〔梶丸 2016〕で行なった、計量テキスト分析による話題抽出の試みの続編に当たる。計量テキスト分析はテキスト型データを計量的分析手法によって整理・分析することで内容分析を行なう手法である。この分析手法は多変量解析によって自動的にグループを発見・分類する、定量的な手法を採る Correlational アプローチと、分析者が作成した基準（コーディングルール）に従って言葉や文書を分類する、比較的質的側面を重視する Dictionary-based アプローチを組み合わせることで、大きなテキストデータに対してより妥当な内容分析を行なおうとするものである〔樋口 2014〕。前稿〔梶丸 2016〕で行なったのはこのうち Correlational アプローチであった。分析対象としたのは金澤八幡宮で行なわれる大会で歌われた歌詞のうち平成 7 年（1995）から平成 27 年（2015）までの 2907 首である⁽³⁾。平成 7 年（1995）、平成 8 年（1996）、平成 10 年（1998）、平成 13 年（2001）については抄録であるが、掛唄全体の話題を抽出するという目的上問題ないと判断してこれらについても分析に含めた。分析は樋口がこうした計量テキスト分析を行なうために開発したフリーソフトウェア KH Coder を用いた⁽⁴⁾。データに関しては表記をある程度統一した程度で、秋田方言を修正したりはしていない。まずは前稿の分析で見えてきた歌詞の話題分類を簡潔にまとめてみよう。

Correlational アプローチによる話題抽出

分析に際し、まず掛唄の歌詞に対して形態素分析を行なって「語」を抽出した。そのうえでまず首（ひとフシで歌われた歌詞）を分類単位とし、歌詞の似ている首同士を同じクラスターに分けていくクラスター分析を行なった⁽⁵⁾。その結果得られた 12 のクラスターにおける特徴語と、分類された歌詞と特徴語からある程度共通していると考えられる話題を表 1 にまとめた。

表 1 に関してははっきりとした特徴語があったクラスターと、際だった特徴語がほとんどないクラスターがあり、これで明瞭に掛唄の話題が分類できたわけではない。なかでもクラスター 7 やクラスター 12 は、特徴語のみならずそこに分類された歌詞を見ても特定の話題を見出すのが難しい集合であった。いっぽう、クラスター 1 に

は明瞭に仙北荷方節に由来する決まり文句「今日は吉日日柄も良いし なにかよろずの吉左右祝^{きそ}い」が分類され、クラスター3では「飲む」「酒」がかなりはっきりした特徴語になっていたように、ある程度話題としてまとまりのあるクラスターも生成された。また全体を見ると、掛唄や掛け合うこと自体がしばしば言及されるということもわかった。

次に行なったのが抽出語に対する分析である。抽出語上位150語を上位から順に見ていきながら、「掛唄」「今・今年・今日」「酒」「田んぼ」「パチンコ」「総理」などの語から話題を類推した。さらに抽出語の共起関係の近さを見るために、最小出現回数20回以上の語（ほぼ抽出語上位150語に相当）に対して階層的クラスター分析をおこなった。その結果とそこから見てとれる「話題」をまとめたのが表2である。この分析からも表1と共通する話題がいくつか見てとれた。

以上が前稿〔梶丸 2016〕の分析から得られた知見の概略である。この分析で課題として残されたのが、毎年固有名詞が入れ替わる「時事問題」を機械的に抽出・分類することの難しさ、そして明らかに存在するにもかかわらずほとんど析出することができなかった「恋愛」あるいは「色恋」と呼びうる話題である。前者については、毎年の時事問題に関係する固有名詞（人名など）や「総理」などといったある程度共通する語を手がかりにこの話題に触れた歌詞を抽出するという解決方法があるが、後者についてはさらなる検討が必要であった。

そこで、恋愛が話題として言及されていると考えられる掛け合いを同じデータから手動で抜き出し、これに対

〔表1〕1首単位の歌詞の分類（梶丸 2016: 表3, 表4より）

クラスター	特徴語（Jaccard 係数 0.100 以上のみ）	共通していると考えられる話題
1	日柄、吉左右祝い、吉日	決まり文句「今日は吉日日柄も良いし〜」
2	若い	「若い」
3	飲む、酒、気、水	「酒を飲む・水を飲む」「気をつける」
4	今、世の中	世相・「今」
5	秋田、こまち、新潟、美人	秋田と新潟
6	掛け、合う	掛ける・掛け合う
7	年、聞く、頭、声	「年」などを中心とした雑多な集合
8	(なし)	時事問題など
9	掛唄、伝統	伝統掛唄
10	唄、先生	唄について
11	荷方、節、駒、稼ぐ、おばこ、田んぼ	「荷方」・唄について
12	唄う、好き、唄	「唄う」「好き」・雑多な集合

〔表2〕抽出語に対するクラスター分析の結果と話題（梶丸 2016: 81-82）

クラスター	含まれている語	話題
1	今日、吉日、日柄、吉左右祝い	決まり文句「今日は吉日〜」
2	おばこ、稼ぐ、荷方、節	決まり文句「駒にまたがり〜」
3	上がる、値段、米	米価（農業）
4	美人、新潟、秋田、こまち	秋田と新潟
5	飲む、酒	飲酒
6	咲く、花、高い、桜	定型句「梅の匂いを桜に込めて〜」
7	好き、唄う、唄、若い、年、重ねる、味、手、仲間、増える、恵み、会える、共に、今宵、祭り、楽しい	掛唄
8	掛け、合う、掛唄、伝統、守る	掛唄
9	夏、暑い、田んぼ、黄金、来る、秋、雨、天気、今年	天候と稲作
10	(非常に多くの語)	その他

して同様の分析を施した⁽⁶⁾。そのうえで抽出語上位 150 語をリストアップし、全体の抽出語上位 150 語一覧〔梶丸 2016: 表 5〕にない語をピックアップするなど、両者の結果を対照させながら恋愛の掛け合いに特徴的な語について見てみた。その結果、恋愛の歌詞においてよく見られる語は掛唄全体でもよく見られるものがほとんどであり、恋愛に言及していることをしるしづける特徴語は見出しづらいことがわかった。だがそうしたなかで、「好き」「美人」「惚れる」「色」「嬢^{カガ}」といった語が（他の話題に言及していることもあるが）「恋愛」の特徴語と考えることも明らかになった。さらに掛け合い全体を観察したところ、たとえば次の例 1 のように、男性と女性の間における掛け合いが顕著に多いこともわかった。

例 1. 平成 9 年（1997）より⁽⁷⁾

- 1 FNf: みてのかけはし どなたが渡る あなたと私の 掛のはし
- 2 SYm: 好きな同じの 貴方と私 これから七色 掛けましょう
- 3 FNf: 年を重ねた 私だけれど 好きだと言われりゃ 悪くない
- 4 SYm: 年のことなど 気にすな貴方 好きだ同じで 渡りましょう
- 5 FNf: それじゃ七色 ネオンのみち⁽⁸⁾ 渡って一夜を 貴方様
- 6 SYm: ネオン輝く 七色虹も 手を取り足取り ゆきましょう

以上の Correlational アプローチからいくつか掛唄の代表的な話題とそれを特徴づける語が見えてきた。これを手がかりに次節では、掛唄の話題がどのように現われてきたのか、話題にはどのような関係があるのかを Dictionary-based アプローチによって分析する。

2 Dictionary-based アプローチによる掛唄の話題分析

データと方法

Dictionary-based アプローチによる分析で使用した年度ごとの歌詞数は表 3 の通りである。今回の分析では各年度における話題の現れ方も調べるため、最初から話題がピックアップされている抄録のみの年度については分析から除外した。また、書き起こしができていない歌詞が入った組を除外し、前稿で分析したデータから数首誤って歌詞を削除していたのを分析に含めたことから、歌詞数が前稿の分析データ〔梶丸 2016: 表 1〕と異なっている。

このデータに対し、表 4 に示したコーディングルールを用いてコーディングを実行した。このコーディングルール作成にあたっては表記の不統一に対応するとともに⁽⁹⁾、第 1 節で示した分析をある程度反映させたコードを付与するようにした。コーディングの単位は首とした。コードの名称は基本的に第 1 節で見出されたものであるが、時事問題については「中央政治」「ローカル時事」「時事」の三つに分割することにした。「中央政治」はニュースで全国的に流れる中央政界の動向や政策であり、「ローカル時事」は秋田県やより小さな単位における政治的な時事ネタ、「時事」は野球や相撲と

〔表 3〕分析した年度ごとの歌詞数

年度	歌詞数（首）
1997	191
1999	185
2000	201
2002	171
2003	174
2004	139
2005	148
2006	126
2007	154
2008	134
2009	120
2010	122
2011	138
2012	106
2013	138
2014	137
2015	152
合計	2536

〔表 4〕 コーディングルール

コード名称	コーディングルール
* 決まり文句	吉左右祝い 吉日 駒 ' おばこ ' 梅 + の
* 年齢	若い near (年 - (重ねる える 取る とる)) [3] 古い 敬老 老後 敬老の日
* 恋愛	好き 美人 惚れる 色 嬢
* 掛唄	掛唄 唄 歌 歌う 唄う 掛け 荷方
* 農業	畑 田んぼ 稲 稲作 豊作 稲穂 穂先 稲刈り 農協 農政 農林省 減反 黄金
* 天候	日照り 日照 風雨 入梅 梅雨 台風 夏 暑い 秋 雨 天気
* 秋田と新潟	秋田 新潟
* 飲酒	飲む 酒
* 趣味	競艇 競輪 パチンコ
* 中央政治	内閣 官房 総裁 汚職 政権 総理 首相 選挙 国会 議員 靖国 党首 税率 税収 税金 国交 自公民 自公保 行革 入閣 閣僚 辞任 増税 改革 安倍 小泉 村岡 福田 小沢 菅 康夫 鳩山 東国原 外交 麻生 鈴木 野田 アベノミクス
* ローカル時事	町村 村岡 大谷 県政 国体 集落営農
* 時事	少年犯罪 非行 気の毒 犯人 ミサイル 協会 理事 拉致 曾我 水害 震災 放射能 原発 青龍 相撲とり 角界 千秋楽 関取 国技 親方 貴乃花 武蔵川 舞の海 若乃花 巨人 古田 松坂 イチロー

* コーディングルールにある記号の意味は以下の通り。

「|」 = or 接続、「'」 = 抽出語に拠らない文字列指定、「+」 = 連続する語のフレーズ

「near (A-B) [x]」 = 「A と B が x 語以内に近接している場合」

いった毎年話題になるスポーツと、その他大きなニュースになった事件や災害に関する話題をピックアップできるようにした。前節で述べたようにここには固有名詞が出てくることが多いため、用例を見て固有名詞をなるべく多く記述してある。また、「年齢」については「若い」だけではなく「古い」についても多く歌われているため、そういった話題も合わせてコーディングすることにした。

コードが付与された歌詞数とその割合を単純集計したものが表 5 である。これによると、コードが付与された歌詞は全体の約 56% ということになり、全体の半数超が分析対象となったことがわかる。「コード無し」となった

歌詞には非常にさまざまなものが含まれるが、掛け合いの全体がコード無しとなった掛け合いの組はほとんどないため、分析対象とした年度の掛唄における話題の全体像を捉えることは可能である⁽¹⁰⁾。

掛唄における話題の通時的変遷

まず掛唄における話題の通時的変遷を見るために、コードと年度をクロス集計し、各年度ごとのコードが付与された歌詞数の割合を正方形で表示したバブル図を作成した (図 3)。この図を見てまず明らかなのが、「掛唄」の割合の高さである。年度を通じて常に最多割合であり、掛唄大会において「掛唄」が常に話題の中心であったこ

〔表 5〕 コードが付与された歌詞数とパーセント

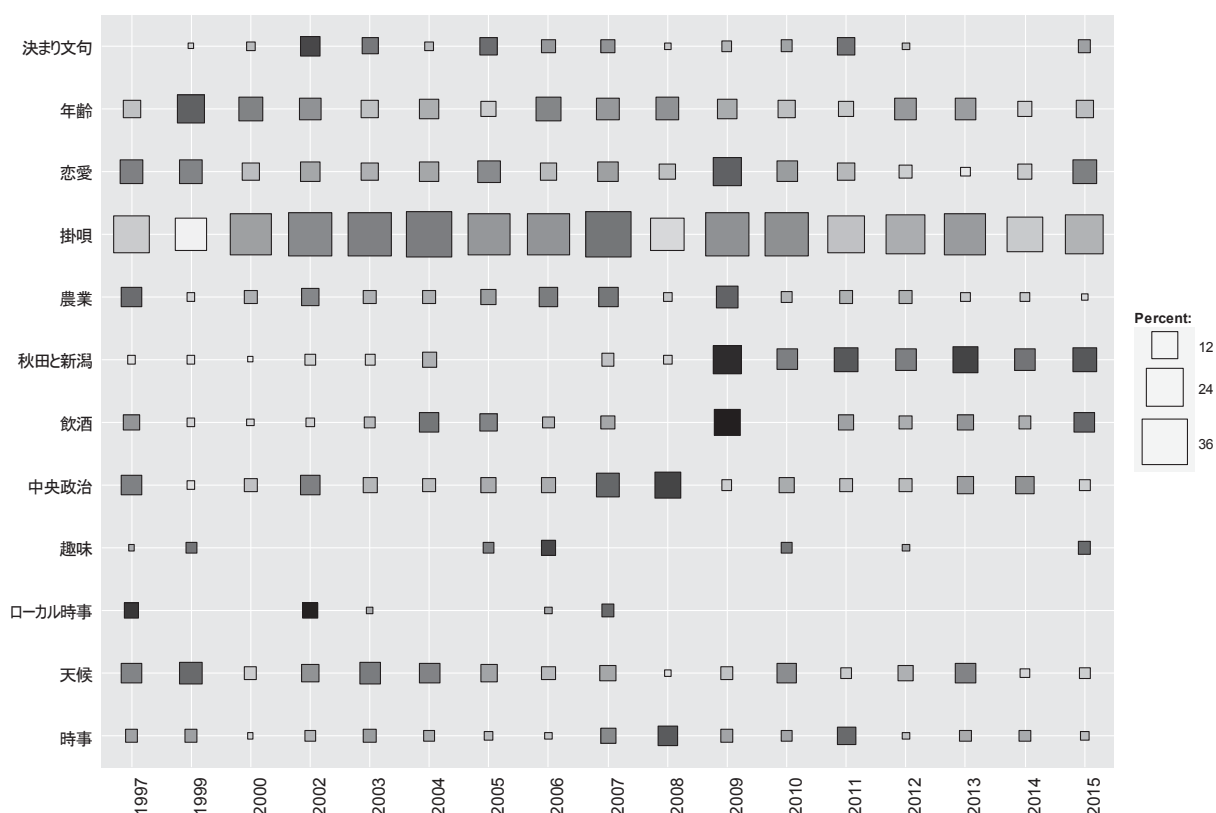
コード名称	歌詞数	パーセント
* 決まり文句	61	2.41%
* 年齢	184	7.26%
* 恋愛	168	6.62%
* 掛唄	709	27.96%
* 農業	90	3.55%
* 天候	119	4.69%
* 秋田と新潟	111	4.38%
* 飲酒	86	3.39%
* 趣味	21	0.83%
* 中央政治	116	4.57%
* ローカル時事	20	0.79%
* 時事	63	2.48%
コード無し	1123	44.28%

とがわかる。このほかに毎年見られる定番の話題となっているのが、「恋愛」「年齢」「農業」「中央政治」「天候」「時事」である。また「飲酒」と「決まり文句」についてもほぼ毎年歌われている。決まり文句については初心者がほぼ必ず歌うものであるが、割合としては毎年比較的小さいことから、仙北荷方節本来の歌詞である「決まり文句」は掛け合いにおいて定番ではあるものの、あまり好まれていないと考えられる。これについてはたとえば2012年に行ったインタビューである熟練の歌手が別の歌手を「最近（即興で）歌詞が出てくるようになった」と評価したように、掛唄では即興で歌詞を作って歌うことが決まり文句を歌うより高く評価されることから裏付けられる。

年度ごとの各話題の出現割合を見てみると、「時事」が比較的多かったのは平成20年（2008）と平成23年（2011）である。用例を確認すると、これは平成20年（2008）に岩手・宮城内陸地震、平成23年（2011）に東日本大震災があったことによることがわかる。たとえば「地震大国日本だけど ゆれる地震の恐ろしさ」（2008）⁽¹¹⁾といった歌詞がここには含まれている。掛唄が歌われている地域は直接地震の被害があったわけではないが、隣県における大地震が与えた衝撃は大きかったことをこの図から読み取ることができる。

年度ごとの話題出現割合においてもうひとつ指摘したいのが「秋田と新潟」である。この話題は明らかに平成21年（2009）に一気に増えて定番化している。前稿でも述べたように、用例を見てみると「新潟」は北朝鮮拉致問題が話題になった年以外はすべて、新潟大学の伊野ゼミが参加するようになった後に現われている〔梶丸 2016:84〕。これにより、伊野ゼミからの参加者が掛け合いの話題に大きな影響を与えていることが定量的に示されたと言えるだろう。

歌手のなかにはかつて掛唄の話題が身近なものに限られていたと述べた人もいるが〔梶丸 2014:51〕、図3全体を見てみると「秋田と新潟」が増えた以外、少なくともここ20年間の全体的傾向として話題の大きな変化は見



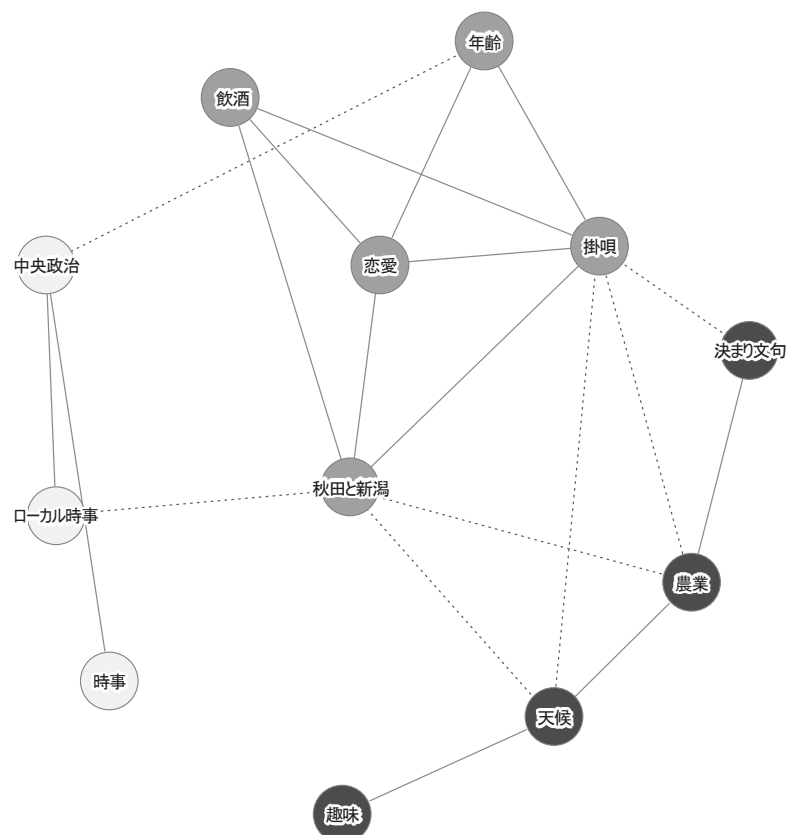
* 正方形の色の濃淡は標準化残差の大小を示す。つまり、各コード内における出現割合が高い年度の正方形が濃い色で表示されている。

〔図3〕 クロス集計のバブル図

られない。強いて言えばローカルな時事については平成 20 年（2008）以降歌われていないことが指摘できるが、そもそもローカルな時事問題については全体的にあまり話題に上がっていない。ローカルな時事のほうが身近なようにも思われるが、少なくとも掛唄においては全国ネットのマスコミで報道される時事のほうが県や市町村レベルの時事のほうがはるかに話題に上りやすい。その要因として、県政や市町村の時事より全国的なニュースのほうがよく報道されていることが考えられる。インタビューによると歌手たちの多くは普段あまり付き合いがなく、どちらかというところとあっさりした関係にあるという〔梶丸 2014:53〕。そうした人々にとって共通の話題となりやすいのは、注目する人が限られる地域の時事より、テレビや新聞から得られるニュースなのであろう。いっぽう「農業」や「天候」は地域共通の生活基盤に関係しており、「年齢」「恋愛」は歌手の属性と関係している。以上は、なにがどのような理由で歌手にとって共通の話題となるのかについて重要な示唆を与えてくれる。

話題間の関連性

次は話題間の関連性についての分析である。話題への言及は必ずしも単独で現われるわけではなく、1 首のなかで共起することもある。コーディング結果を集計してみると、付与されたコード数が 1 つだった歌詞は 1110 首と全体の半分近く（約 44%）であったが、コードが 2 つ付与された歌詞は 271 首、コードが 3 つ付与された歌詞も 32 首あった。たとえば「あなたの唄でワシヤ迷わされた 若い男さ惚れてみたて迷うて泣く」（2000）では「掛唄」「年齢」「恋愛」の 3 つが組み合わせられて言及されている。こうした共起関係を探れば、話題間のつながりの強さを明らかにすることができる。そこで、コーディングしたデータを用いて共起ネットワークを作成した（図 4）。コード数が 12 であることを考慮し、共起関係の描画数はすべてのコードが表示される最小の数であった 20 に



*グルーピングは random walks による。丸の色はグループを、点線はグループ間の共起関係を、実線はグループ内の共起関係を示している。

〔図 4〕コード間の共起ネットワーク

設定してある（要素の図示と描画数の問題については後述）。図4の共起ネットワークで重要なのはコードの位置関係ではなく、線で結ばれているかどうかである点に注意が必要である。また、比較的強く互いに結びついているコードを random walks によって自動的に検出しグループ分けを行なうサブグラフ検出〔樋口 2014:160〕を行った結果、3つのグループが検出された⁽¹²⁾。図4の各コードの色分けはこのグループを示している。また点線はグループ間を繋ぐ共起関係を、実線はグループ内の共起関係を示している。

KH Coder が R を用いて生成する共起ネットワークでは他の要素と共起関係にない要素は表示されないので、逆に共起ネットワークを作成するにあたり描画数を増減させることで共起関係の強さ（Jaccard 係数の高さ）を見ることが可能である。その結果、「趣味」「時事」「決まり文句」「中央政治」「ローカル時事」はいずれも他のトピックとの共起が弱いことがわかった。特に「趣味」については描画数 19 未満では表示されず、他との共起関係が弱いことが示唆された。こうした共起関係の強さについては、やや見づらいが表6に示したコード間の類似度行列から数値で確認することができる。この表で示した数値は Jaccard の類似度測定値（Jaccard 係数）である。この値は 0 から 1 の間を取り、同じ歌詞内で出現することが多いコード間ほど値が 1 に近づく。ちなみに、表6の「* 掛唄」の列だけすべてのコードとの間の値が 0 より大きいことから、「掛唄」だけはどの話題とも共起しており、他の話題と比べて別の話題とかなり共起しやすいことが見てとれる。これに対して他のコードとの共起関係が低いコードは、そのコードだけで話題が完結しがちであることを意味している。実際の用例を見てみると確かに、たとえば「中央政治」のコードが付与された歌詞では「内閣改造ととたんに辞任 福田総理を国民が怒る」（2008）「麻生総理もあと一日 鳩山内閣に変わるよ」（2009）のように、端的に当時の中央の政治状況について言及しているものが多い。

図4にあるグループそれぞれを見てみると、左側のグループについてはいずれも時事問題に関するものであることから、掛唄において時事問題が基本的に独立した話題群を形成していることを示していると考えられる。また、表6にある Jaccard 係数を確認するとこのグループの各コード間もさほど高い関連性があるわけではないことがわかる。

共起ネットワークの右側にあるグループについて見てみると、「天候」と「趣味」の結びつきは表6では Jaccard 係数 0.014 で実際のところかなり弱いと考えられる。「決まり文句」と「農業」については 0.063 でこれよりは高いが、用例を確認すると「駒にまたがり田んぼをゆけば 稼ぐお婆この荷方節」という決まり文句があるためであるのがわかる。仙北荷方節はこの地方における代表的な祝い唄のひとつであったため、収穫を祝う歌詞があるのも当然であろう。これらに対し、「農業」と「天候」の結びつきは Jaccard 係数 0.13 と桁違いに高く、両者がこ

〔表6〕コード間の類似度行列

	*決まり文句	*年齢	*恋愛	*掛唄	*農業	*秋田と新潟	*飲酒	*中央政治	*趣味	*ローカル時事	*天候	*時事
*決まり文句	1	0	0.004	0.028	0.063	0	0	0	0	0	0.006	0
*年齢	0	1	0.051	0.069	0	0	0.004	0.017	0	0.01	0	0.008
*恋愛	0.004	0.051	1	0.091	0.004	0.086	0.041	0	0.011	0	0	0.004
*掛唄	0.028	0.069	0.091	1	0.015	0.021	0.034	0.002	0.001	0.006	0.018	0.004
*農業	0.063	0	0.004	0.015	1	0.026	0	0	0	0	0.13	0
*秋田と新潟	0	0	0.086	0.021	0.026	1	0.037	0.004	0	0.023	0.027	0.006
*飲酒	0	0.004	0.041	0.034	0	0.037	1	0	0	0	0.01	0
*中央政治	0	0.017	0	0.002	0	0.004	0	1	0	0.046	0	0.023
*趣味	0	0	0.011	0.001	0	0	0	0	1	0	0.014	0
*ローカル時事	0	0.01	0	0.006	0	0.023	0	0.046	0	1	0	0
*天候	0.006	0	0	0.018	0.13	0.027	0.01	0	0.014	0	1	0

* 値は Jaccard の類似度測定値。

のグループの中心となっていることが見てとれる。

残った中央のグループは「飲酒」「年齢」「掛唄」「恋愛」「秋田と新潟」で構成されている。ただし、この5つのコードはすべて互いに繋がっているわけではなく、表6を見ると「年齢」と「秋田と新潟」にはまったく関連性がなく、「年齢」と「飲酒」もかなり関連性が低いことがわかる。そのほかの組み合わせについても関連性には強弱がある。そうしたなかで比較的関連性が高いのが「恋愛」と「掛唄」(Jaccard 係数 0.091)、そして「恋愛」と「秋田と新潟」(Jaccard 係数 0.086)である。前者については「好きな唄でも互いに唄い 唄う掛け合い難しい」(2008)のように「掛唄が好き」という意味で「恋愛」のコードが付与される条件である「好き」が使われている(つまり「恋愛」の話題ではない)歌詞と、「声は良いよい器量も良くて 唄の響きにわしゃ惚れた」(2007)のように「掛唄」と「恋愛」が実際に組み合わされている歌詞の両方がカウントされているためであると考えられる。後者については用例を見てみると「新潟美人はあたまも良いし ちなみにスタイル抜群だよ」(2015)のように新潟大学の女子学生を褒める歌詞が多い。なお前節で述べたように「恋愛」に関しては男性と女性が組になったときに歌われることが多く、そこではたとえば「沢目で育った姐ゴの姿 何時見ても笑顔とこの美人」(1997)のようにしばしば男性が相手の女性の美しさを褒める。新潟大学からの参加者は大半が女子大生であるため、この「女性の美しさを褒める」という定番の掛け方の延長線上に「恋愛」と「秋田と新潟」のつながりがあると考えられる。

3 結論

冒頭に述べたように、掛唄はほぼ完全に即興で歌が掛け合われる点に特徴がある掛け合い歌である。掛け合いではまるで日常会話の延長線上にあるようなやりとりが行なわれ、その話題は多岐にわたっている。そこで前稿〔梶丸 2016〕と本稿において掛唄の歌詞を対象に計量テキスト分析による話題の分析を行ってきた。全体的な手順として、前稿〔梶丸 2016〕および「恋愛」に関して追加で分析・検証を行なった Correlational アプローチによって示された「話題」をもとに、本稿では話題を特徴づける語を用いてコーディングルールを作成したうえで、「話題」を示すコードの出現割合の通時的変遷と、コード間の関係性をそれぞれ探った。

ここまでの分析を振り返ると、話題の通時的変遷については平成 20 年(2008)以前に比べて平成 21 年(2009)以後「秋田と新潟」が増えたこと以外、一貫した変化は見られなかった。この「秋田と新潟」の増加は新潟大学からの参加者が来るようになったことを反映している。「時事」について隣県で大地震が起きたことを反映した増加が見られたこと、そのほか「時事」が毎年常に歌われていることも併せて見ると、以上の点は掛唄の話題の柔軟性、あるいは前稿で論じた、「今・ここ」にある掛唄の場を起点として歌が掛け合われているという、掛け合いの出来事性を例証している。

また、ここでの分析から副次的に明らかとなったのが、歌い手にとって身近な共通の話題とはなにか、という問題である。時事問題関連の話題については、秋田県内のローカルな時事問題より中央(政府)の政治問題や全国ネットで流れる事件やスポーツネタのほうがはるかによく歌われることが示された。いっぽう「農業」や「天候」、「年齢」「恋愛」も毎年歌われていると考えあわせると、歌い手にとって身近な共通の話題は、マスコミで流れるものと地域共通の生活基盤、そして歌い手の属性であると考えられる。

続いて話題間の関連性を共起ネットワークと類似度行列から探った。まず類似度行列からは「掛唄」がとりわけ他の話題と共起しやすいことがわかった。共起ネットワークからは話題がおおよそ3つのグループに分けられることが示されるとともに、話題には他の話題と共起しやすいものと自身だけで完結しがちなものがあることがわかった。共起ネットワークにおけるグループの一つめは時事問題関連のグループであり、これらは互いの関連

性が強くなく、比較的独立した話題群を形成していることがわかった。二つめは「農業」と「天候」を中心とするグループであった。三つめは「飲酒」「年齢」「掛唄」「恋愛」「秋田と掛唄」で構成されるグループであり、このグループ内でも関連性の強弱が観察された。関連性（共起性）が特に強かった2つの組み合わせのうち「恋愛」と「掛唄」についてはコーディング上の問題と実際に表現上組み合わせた形で言及されやすいことが、「恋愛」と「秋田と新潟」については歌手が男女の組になると男性側が女性の美しさを褒めるという定番の掛け方が敷衍されたものと考えられることがわかった。

以上、本稿の分析から明らかとなった知見の中にはもともと印象論的に把握されていたものもあるが、そうした点について定量的に検証し、さらに掛唄における表現の質的研究を進める上での示唆も得ることができたことが本研究の収穫である。とはいえ、前稿に引き続き分析の単位をほぼ個々の歌詞に絞った点に分析の不十分さが残っている。たとえば前出の例1のような事例を見てみると、掛唄の話題を捉えるうえで掛け合いによる話題の推移を扱う必要性もあることは明らかである。会話分析研究者の串田が言うように、会話において話題は話の流れに乗って自らの発話を生みだし話の流れを作るという循環的営みを通じて、会話者たちが相互行為的に作り出す「規範性を備えた流れの様式」である〔串田 1997:176-177〕。このことは当然掛唄にも当てはまる。よって、掛唄における話題のありかたを捉えるためには、掛け合いという要素を捨象した分析では不十分であり、掛け合い全体を分析単位として、どのような話題がよく共起するかといった側面を分析していくことも必要である。これについてはデータセット全体を違う形状で用意する必要があったことから、本研究では扱うことができなかった。また、たとえこれができたとしても「掛け合い全体を正確に捉えた」とは言えないだろう。計量テキスト分析で行えるのはあくまで概要の分析であり、詳細な分析は会話の流れを微細に、質的に分析していく会話分析的な手法を用いていく必要がある。こうした、量的研究と質的研究を組み合わせることで、掛唄における「流れの様式」を捉えていくことが今後の課題である。

付記

本研究では新潟大学教育学部の伊野義博教授とゼミ生の皆様、現顧問の加藤義男氏をはじめ金澤八幡宮伝統掛唄保存会や歌手の皆様にご協力をいただいた。また京都言語学コロキウムでは分析について貴重なコメントを数多くいただいた。現地調査の一部については日本学術振興会特別研究員奨励費によって支援を受けた。それぞれここに改めて深く謝意を表したい。

注

- 1 掛唄の概要については梶丸〔2014b〕も参照されたい。
- 2 前稿と同じく、本稿でも「話題」を、相互行為の流れの中で表われる点を念頭に置きつつ、基本的に「タイトル的に示される、発話（本研究の場合は歌詞）がそこに向けられているもの」〔梶丸 2016:73〕として扱う。
- 3 平成7年（1995）から平成20年（2008）までは、金澤八幡宮伝統掛唄大会の元会長（現顧問）である加藤義男氏よりご提供いただいた記録と、秋田県教育委員会の記録〔秋田県教育委員会編 1999〕に拠る。
- 4 KH Coder の設計思想と機能の詳細については樋口〔2014〕を参照。
- 5 条件の詳細については前稿〔梶丸 2016〕参照。
- 6 この分析結果については2016年2月27日に京都大学で開かれた京都言語学コロキウムで発表した。
- 7 歌詞の歌手を現わす記号のうち、大文字は仮名、m と f はそれぞれ男性・女性を表わす。
- 8 本稿の趣旨とは関係ないが、この歌詞は歌謡曲をふまえている点が興味深い。「七色ネオン」は三条町子「かりそめの恋」（昭和24年（1949））の歌詞にある。昭和51年（1976）の海原千里・万里「大阪ラブソディー」、昭和59年（1984）の木下結子「放されて」でも同じような歌詞が使われている。
- 9 前稿で使用したデータセットを誤って前稿執筆後に上書きしてしまったため、本稿の分析ではデータセットを作り直した。そのため語句の統一など前稿のデータ整備段階で行なった調整が一部反映できなかった。また、不正確な抽出であるがコーディング上問題のない語については強制抽出機能による調整を行わなかった。たとえば「時事」の条件にある「青龍」は語の自動抽出で「朝青龍」から分割されたものであり、「朝青龍」以外では使用されていない語であるためコーディング上問題ないと判断した。
- 10 とはいえ、コーディングルールを改善することでコードが付与される割合は向上するはずであり、より緻密な分析を行なう

うえでこの点は今後の課題である。

- 11 引用した歌詞の後ろに付けた括弧内の数字は歌われた年度を示す。
- 12 なお KH Coder ではほかにサブグラフ検出の方法として媒介性に基づく方法と modularity に基づく方法が実装されている。これらも試してみたところそれぞれ若干異なるグループ分けがなされたが、本節では妥当と考えられる解釈が最も容易であった random walks によるグループ分けに基づいて話題の関連性を分析する。

参考文献

- 秋田県教育委員会編 1999 『秋田県指定無形民俗文化財 金澤八幡宮掛け歌行事—文化財収録作成調査報告書』、秋田市、秋田県教育委員会。
- 安倍完爾・佐々木孝治・小西弘蔵・畠山善栄・熊谷暁編 2003 『即興詩人の郷—全県かけ唄大会五十回記念誌』、六郷町、六郷町かけ唄保存会。
- 梅澤伸子 1999 「近世流行歌—江戸風流人の愛好歌謡」、小野恭靖編『歌謡文学を学ぶ人のために』、京都、世界思想社、183-197。
- 梶丸岳 2013 『山歌の民族誌—歌で詞藻^{ことば}を交わす』、京都、京都大学学術出版会。
- 梶丸岳 2014a 「「歌垣」から歌掛けへ：歌掛けの民族誌的研究に向けて」『社会人類学年報』40、133-150。
- 梶丸岳 2014b 「秋田県の掛け合い歌「掛唄」の今」『民族音楽研究』39、49-60。
- 梶丸岳 2016 「掛唄で歌われることはなにか—計量テキスト分析による掛唄の話題抽出の試み」『日本伝統音楽研究』13、71-86。
- 加藤義男編 2007 『金澤八幡宮伝統掛唄秋田県無形民俗文化財指定 15 周年記念誌』、横手市、金澤八幡宮伝統掛唄保存会。
- 串田秀也 1997 「会話のトピックはいかに作られていくか」、谷泰編『コミュニケーションの自然誌』、東京、新曜社、173-212。
- 中原ゆかり 1997 『奄美のシマの歌』、東京、弘文堂。
- 樋口耕一 2014 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』、京都、ナカニシヤ出版。
- 宮崎隆 1990 「「掛唄」の現代—秋田県仙北郡のうたがけ考—」『日本歌謡研究』30、107-113。

What is being sung in *Kakeuta*? (2): A topic analysis of *Kakeuta* using quantitative text analysis

KAJIMARU Gaku

Kakeuta is a kind of reciprocal singing still practised today in Akita prefecture. This performance is characterized by its highly improvised nature. This paper presents the results of quantitative text analysis of the verbal aspect of *kakeuta* for investigating the diachronic changes and the relationship of its topics.

Quantitative text analysis consists of two phases: correlational approach and dictionary-based approach. Firstly, the method and the results of correlational approach were summarized, and showed how the topics of *kakeuta* can be extracted. Secondly, in the dictionary-based approach, a set of coding rules was written based on the results and analyzed the words of *kakeuta*. According to the cross total sum of topics and years, it was suggested that there were few remarkable changes of topics with some exceptions. The relationships among the topics were examined by the co-occurrence networks and similarity matrix, and their causes were considered through some examples of *kakeuta*.

Finally, for research was to clarify the whole interaction of *kakeuta* through quantitative and qualitative methods it was suggested that the future task.

Keywords: *Kakeuta*, topic, quantitative text analysis